

平成 21 年度研究功労賞推薦書

受賞対象者 山内 俊雄先生

山内俊雄先生は、昭和 38 年（1963）3 月に北海道大学医学部を卒業された。1 年間のインターンを終えた後、昭和 39 年 4 月から、北海道大学大学院（医学研究科）に入学、神経生理学教室にて、電気生理学的に脳や神経の活動電位を記録し、脳内の反射経路や脊髄・脳幹反射、脊髄反射などの研究を行い、昭和 44 年に、医学博士を取得され、北海道大学精神医学教室に入局されました。北海道大学精神医学教室は初代教授の内村祐之、初代てんかん学会理事長秋元波留夫、キンドリングのはじめといわれる渡邊栄市先生、カナダバンクーバーで活躍中の J. A. Wada 先生、静岡てんかんセンター所長を務められた和田豊治先生、清野昌一先生をはじめといたる多くのてんかん研究者を輩出してきた教室であり、タングステン酸ゲルというけいれん誘発物質をネコの脳の各部位に注入あるいは塗布してけいれんを起こす実験を行い、発作の伝播経路を電気生理的に明らかにすることや、発作の起こりやすい部位、神経系の成熟と共に発作の起こり易さがどのように変わるのか、といった研究に打ち込んでおられた。その延長で、昭和 52 年より 2 年間アメリカ National Institutes of Health（米国立衛生研究所、NINCDS）において、Cosimo Ajimone-Marsan 先生の下で単一神経細胞の発火の研究、神経細胞群として発作波の形成のしやすさが脳部位によって異なるのかなどについて、ペニシリンを用いたてんかん発作発現機序についての研究で大きな業績を得られております。帰国後、昭和 51 年に創設された、北海道てんかん懇話会の事務局長として、会員の基礎研究と臨床研究を積極的にご指導いただき、その後の北海道てんかん懇話会の発展のため大きな活躍をされました。昭和 55 年には、年 1 回の機関紙「てんかンをめぐって」の初刊を編集委員長として発刊され、現在まで毎年発行される貴重な機関紙の礎を築かれました。北海道大学精神神経科は多くの難治性てんかん患者が訪れていたため、長期にわたって抗てんかん薬を服用している患者さんを対象に、機能的障害や精神症状についての研究、てんかンを病む患者さんや家族、その医療に関わる人たちの意識調査などの研究、新薬の開発治験にも積極的に関わってこられました。

昭和 61 年（1986）に埼玉医科大学精神医学講座教授にご就任。日本てんかん学会の理事として、また、日本てんかん協会の理事、副会長、監事として、てんかんに関わる二つの組織に関係され、てんかん者の QOL の問題に取り組んでおられます。

平成 5 年（1993）に英国でゲーム中に発作を起こし死亡する事件が発生したことを契機として、国際的研究組織を設立することになり、Committee on TV Game-induced Seizure の委員長を務め、また、平成 9 年（1997）12 月 16 日に発生したいわゆる「ポケ

モン発作」の研究班の委員長として発作発現メカニズムを解明する作業に積極的に取り組んで、素晴らしい研究成果をまとめられています。平成 14 年(2002)には第 36 回日本てんかん学会ならびに 4th Asian Oceanian Epilepsy Congress の会長を務められました。これまでに国内外の多くの関連学会の要職につかれており、また多くの原著論文、総説、著書を執筆されていますが、その中でも「中枢神経実験法」は、私の座右の書の一つとして今でも多くのことを教えられています。

平成 16 年 8 月に、埼玉医科大学学長に就任されました。ますます多忙な環境の中でも、山内先生の、てんかん学との長い関わりの中で培われた、てんかんの実験的・臨床的経験を基に、それまでの「発作を止めること」から、「てんかん者がどう生きるか」という問題にも取り組まれ、日本てんかん協会などと社会活動へも積極的に参画されておられます。

てんかんという道に生全身全霊を傾けてこられた山内先生が、この栄えあるてんかん治療研究振興財団研究功労賞の受賞候補者に指名されたことは、北海道てんかん懇話会会員にとっても、大きな名誉と喜びであると同時に、日本てんかん学会会員にとっても名誉なことであり、ご推薦申し上げます。

日本てんかん学会理事長
北海道てんかん懇話会会長
旭川医科大学脳神経外科教授
田中 達也